

神の言としての聖書

——福音派の証し——（抄訳）

クラス・ルニア

序

- 一 三つの聖書観
- 二 啓示
- 三 靈感
- 四 権威
- 五 無謬性
- 六 聖霊のみわざ

序

聖書の教理において、わたしたちは神学の基盤そのものを取り扱うのであって、このことは、自由主義に立つ者も、ひとしく認めるところであろう。しかし、自由主義者たちが聖書について論じる時、聖書以外の資料をも、同じ

ような意味で受け容れることを指摘しなければならない。

たとえば、J・マツコーリーは、『キリスト教神学の原理』の中で、神学形成の要素として、経験、啓示、聖書、伝承、文化、理性を挙げている。このように、聖書と並べて他の要素を設定することにより、自由主義者は聖書の権威を制限することとなる。やがて、他の要素——特に、経験と理性とが、最終の権威をもって語るることとなる。

福音主義者の出発点は、自由主義者のそれと異なり、改革者にならって、聖書を神学の唯一の原理とし、これを単一原理と呼ぶ。宗教改革の諸信条にこれが見いだされることは指摘するまでもない。たとえば、ウエストミンスター信仰告白第一章第一項——聖書は「救いに必要な神とそのみ旨についての知識」を与える。同じく第一章第六項——「神のご自身の栄光、人間の救いと信仰と生活のために必要なすべての事柄に関する神のご計画全体は、聖書の中に明白に示されているか、正当で必然的な結論として聖書から引き出される。その上には、みたまの新しい啓示によっても、人間の伝承によっても、どのような時にも何ひとつ付加されてはならない」。

一 三つの聖書観

(一) 古自由主義
福音派の証しをなすためには、他の観点に対して、何が福音的観点であるかを明白にする必要がある。

聖書は純粹に人間の書であり、過去の信者の宗教体験の記録である。特に、イスラエル民族と、後のキリスト教会の信者の中には、深い宗教体験を持つ者があり、また、神についてのより深い意識と理解を有する者があった。この体験の深さが、後の時代に対して大きな価値を持つこととなる。価値を有するのみならず、権威をも有する。

しかし、この権威は、制限されたものであり、相対的なものである。創造的であり、人を鼓舞するものではあって

も、つねに、各人の経験と洞察によってチェックさるべきもので、その意味では、あくまでも主観的なものであって、決して、終局の権威ではあり得ない。自由主義にとつて、最終のものは、各人の自分の経験である。

(二) 新正統主義、新自由主義(バルト、ブルトマンの立場)

聖書は徹底的に人間の書である。ただし、古自由主義と異なる点は、聖書を、主観的な人間体験の記録とするのみならず、神の啓示——イエス・キリストにおける神の啓示——の証しであるとするとする点である。「証し」とする限り、それは純粹な意味で人間の文書であり、事実誤認や評価・判断の誤りをも含む。

しかし、神の聖霊が、この「証し」を、わたしたちのものとする時、この、人間の誤りうる証しが神の言、すなわち神の啓示となる。権威について言えば、聖書は同時に、相対的であり、また絶対的である。

1 啓示についての人間の証しである限りにおいて、聖書の権威は相対的。人間の書として、聖書は自由に批判される。バルトとブルトマンは、この点で合意する。批評という点について言えば、バルトはひじょうに控え目であるのに対し、ブルトマンはむしろ急進的である(非神話化)。

2 神がよしと見たもう時、この証しを通して語り、そこに啓示が起る。そこで、神がわたしたちに直接語る時、聖書の権威は絶対のものである。

(三) 福音主義

福音主義の理解によれば、聖書は神の言である。人間の言葉をもって書かれたものであるが、人言性において、神がわたしたちに語る。B・B・ウォーフィールドの『聖書の靈感と権威』の中で明白に提示されている福音派の聖書を、彼の言葉を引用することによって示そう——「聖書は、神が言われたことについての人間のレポートではなく、それ自身、まさに神の言である。人間の唇とペンを通して、神が自身の語られた神の言である。……創世記の『は

じめに神は』から黙示録の『アメン』に至るまで、聖書はまぎれもない神の言である。神の生命に満ちみちた神の言、神の靈感を受けた神の言、あらゆる敬虔な読者に、神が自身を吹き出して提供するが如き神の言である」。

これは、主イエスご自身と使徒たちの見解であった。新約聖書の中で、旧約聖書について語られている箇所をひとつひとつ挙げる要もないほどに、このことは明白である。ウォーフィールドも指摘するように、これらの箇所は、数多くあり、それらは、いわば、ひとかたまりとなつて、わたしたちの上のしかかっている。新約聖書のこれらの証言を消し去ろうとすれば、全新約聖書を消し去ることとなる。

以上が、福音主義の見解であり、また、いわゆる古典的見解である。少なくとも、十八世紀になって、高等批評が始まるまでは、全教会によって主張されて来たところであった。教会教父・中世の神学者・改革者とこれに従う者。今日の保守的、福音主義的な立場に立つ者・ローマ教会の支持するところである。

第二バチカン公会議の『神の啓示についての教義憲章』は次のように宣言する——「聖書のテキストに含まれ、提示されている、神によって啓示された実体は、聖霊の靈感の下に書かれた。聖なる母なる教会は、使徒時代の信仰に依りたのみつつ、旧・新両約の聖書を全体として、聖なる經典として受け入れる。その根拠は、聖霊の靈感によって書かれたということである(参照 ヨハネ二〇・三一、Ⅱテモテ三・一六、Ⅱペテロー・一九・二一、三・一五、一六)。聖書の著者は神であり、まさにそのようなものとして、教会に与えられ、引き継がれてきたのである」。

ローマ教会の見解について語る時、口伝と教義を聖書解釈の無謬の権威とする立場に言及しなければなるまい。詳細に立ち入ることは許されないが、聖書を神的権威を有する神の言とする時、ローマ教会が、前述の権威を聖書の上に付加することによって、聖書の権威そのものを弱体化したことを強く主張せねばならぬ。決定的な点において、ローマ教会は、もはや、真の意味で権威について語ってはいない。

福音派の聖書観を展開するにあたり、二つの前提Ⅱ啓示、靈感、二つの関係Ⅱ權威、無謬性について語ることにしよう。

二 啓示

神はご自身を、おのが民の贖い主として啓示された——これが福音派聖書観の大前提である。啓示とは、つねにご自身啓示である。

聖書の啓示の中心は、神が、ご自身を啓示しておられるということにある。この啓示は、

(一) 歴史における神の行為——ご自身の選民の歴史——において、また

(二) ご自身の預言者を通しての言葉——ご自身の選民に宛てて語られた言葉——において

なされた。ことさらに「選民」と言ったのは、啓示に制限のあったことを指摘するためである。もちろん、全世界・全民族にわたる一般啓示があり、聖書もこれを明白に語るが(詩篇一九、ローマ一、二他)、これは、創造者・統治者としての神の自己啓示であって、そこには、贖いのメッセージはない。むしろ、罪人は、この啓示を認めて受け容れることを拒否しているという事実がある(ローマ一章、真理を拒む結果としての偶像礼拝の指摘)。

贖い主としての神の自己啓示は、歴史の中において、一般的にはなく、個別的になされた。先ず、その啓示は、イスラエルに來た——イスラエルの歴史の中で、イスラエルの預言者を通して。しかし、イスラエルに対する神の自己啓示は、それをもって終わるのではない。それは、いわば、予備的なものであって、時の満つるにおよび、神は我が独り子の受肉をもって、ご自身を啓示された。み子は、それまでのすべての啓示——行為と言葉における——の極点であり、頂点であった。

まことに、主ご自身が言われたように、「わたしを見た者は、父を見たのである」(ヨハネ一四・九)。さらに、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」(ヨハネ一四・六)。

イエス・キリストこそは、神の自己啓示である。この確信は、しかしながら、他の宗教を奉ずる者、また、自由主義神学者にとっては、つねに、つまずきの石である。古自由主義(十九世紀および二十世紀の四半世紀)の神学者は、この「特定主義」に、はげしい反対を示した。彼らは、一般啓示を信じるのみで(啓示について語ることをよしとする限りにおいて)、彼らにとって、イエス・キリストは、神に至る多くの道のひとつに過ぎない。カール・バルトが、あのように熱烈な反応を示したのは、この純粋に内在論的な考え方に對してであった。バルトは、あるいは、この点において行き過ぎたのもあるが、一般啓示の概念を、頭から拒けるまでに傾き、すべての眞の啓示は、キリストにおける啓示であると主張するに至った。いわば、啓示の特定主義を度を超えて強調したのでもある。

バルトには、同時に、普遍主義の要素もうかがわれる。イエス・キリストは、信ずると信ぜざるとを問わず、すべての人に代って神の怒りを負ったとバルトが言う時、客観的には、すべての人が贖われると言うに等しい。もちろん、信ずる者とは、贖いを主観的に知る者であるとの区別を立てはするが、バルトによれば、われわれは、不信者に向かって、「あなたがたは、すでに贖われています」と宣言しなければならぬこととなる。

第二次世界大戦以後、バルトの啓示観におけるキリスト中心主義、キリスト一元論に對する強力な反動が、新自由主義の形であらわれるに至った。バルト後自由主義と呼ばれるのも一理あるところであろう。

新自由主義神学者は、啓示の概念をあくまでも保有しようとする。前述のマッコーリーは言う——「人間の信仰は、彼の信仰が向けられるところのもの、イニシアティブによって可能とされる。人間は自分を超えたものから、そのイ

ニシアタイプを体験するものだ」。

しかし、新自由主義は、啓示が、イエス・キリストにおける啓示に制約されるべきではないと考える。マッコーリーは、キリスト教、仏教、ヒンズー教、イスラム教などのいわゆる大宗教は、同じような意味と程度において、啓示・恵み・神のニシアタイプを有すると言って、キリストにおける啓示の獨一性を否定するに至る。

それは、結局のところ、新しいシンクレティズムを導き出すこととなる。マッコーリー自身は、それを否定し、自分をシンクレティズムの圏外に置こうとはするが、イエス・キリストを啓示の一、例に過ぎぬと彼が主張する限り、それは、キリストを徹底的に相対化することであり、かの普遍主義の神学の側に自分を置くこととなるのである。

このような見解に立つとすれば、すべての伝道活動は終わりとなる。マッコーリーは、伝道をいくらかは保たんとするが、彼によれば、伝道は、もはや、回心者を得ることではないし、いわんや、世界をキリストに向けてかちとることでもない。ただ、魂を解放して、好きなようにさせる、好む方向へと、自由に赴かせることが伝道になってしまう。

マッコーリーの見解について、時間を費やし過ぎた感があるが、それは、彼の立場が獨創的であるからというのではなく(ブルトマン、ティリッヒの影響が強い。ティリッヒ神学の改訂版と呼び得よう)、彼が、現今の神学の兆候を明白に呈しているからである。

聖書によれば、自然と歴史における神の一般啓示がある。この一般啓示のゆえに、他の宗教の中にも、真理はいくぶん認められている(パウロのアレオパゴス説教を参照)。しかし、イエス・キリストにおける啓示は、この一般啓示のひとつの例ではなく、それ自身、全く新しい啓示である。創造主としてのみではなく、贖罪主としての神の自己啓示である。贖罪啓示として、イエス・キリストにおける啓示は獨一のものである。アレオパゴス説教において、パウロは、イエスを異教の連続線としてではなく、新しい啓示として提示した。「(しかし)、今はどこにおる人でも、みな悔い改めなければならぬことを命じておられる。神は、義をもってこの世界をさばくためその日を定め、お選びになったかたによってそれをなし遂げよう」とされている。すなわち、このかたを死人の中からよみがえらせ、その確証をすべての人に示されたのである」(行伝一七・三〇、三一)。

唯一の贖罪啓示があるのみである。それは、イエス・キリストにおける神の自己啓示である。そして、この啓示が聖書に記録されている。旧約聖書はキリストをさし示し、新約聖書はキリストをふり返り、全体として、キリストを語る。この聖書は、神の言、神の自己啓示である。

三 靈感

聖書が神の言であるということは、いかにして可能なのであろうか。人間によって書かれた書が、いかにして、神の言であるのか。それは、聖書記者が聖霊の靈感を受けた事実に基づく。

自由主義者(古、新を問わず)にとつては、もはや、靈感を容れる場所はない。彼らは、ある意味での照明・啓明について語りはするが、彼らによれば、聖書記者の受けた照明は、すべての信者が受けるものと同種であり、ただ、受ける分量・強弱の差があるだけである。聖書が靈感を受けていると、かりに言うにしても、それは、聖書が、何かしら、人の心に響くからという、主観的なことがらに過ぎぬ。

新正統主義神学者は、聖書の靈感を受け容れはする。聖書記者は聖霊に迫られ、支配されていたとは言う。しかし、この聖霊の行為は、彼らの書いたものが、神の言である、ということの意味しない。書かれたものは、神の言の証し、以上には出ない。聖霊が読者に臨み、この証しを受け入れることを可能とする時にのみ、それは、神の言となる。読者

の上に与えられる聖霊の行為は、靈感の一部分でもある。

自由主義者が、靈感を主観化し、相対化するのに対し、新正統主義者は、靈感を実存化する。靈感とは、くりかえし、くりかえし、起こりうるものである。しかし、いずれの立場においても、つまるところは、聖書そのものは、ふつうの人間の書と変わるところはないこととなる。自由主義においては、宗教体験の書、新正統主義においては、キリストにおける神の啓示の証しである。

福音主義に立つ者は、これらの見解と全く異なり、聖霊の働きのゆえに、聖書記者の書いたものは、単なる人間の言葉ではなく、実際に、また充分に、神のことばであると信じる。

新約聖書を読むとわかるように、新約は、旧約聖書を、神の言として引用している。これは主イエスが自身とイエスの使徒たちの一貫した態度であった。旧約聖書を、聖書記者の「意見」に過ぎぬかの如くに考えたと思われるところは一箇所もない。つねに、「神は語りたもう」として、旧約聖書を引用しているのに注意したい。

靈感について、積極的に語るところとして、Ⅱペテロー・二一を取り上げよう。そこには、三つの言明がある。

(一) 人々が……語った。真正銘の人間であった。機械靈感説の主張するような、単なる受け身の器官ではなく、生身の人間であり、人間として、この事柄にかかわったのである。

(二) 聖霊に感じ。字義通りには、まかせられて。ちょうど風のまにまに船が動くように。

(三) 神によつて語った。彼らの言葉は、結果として、神の言であった。

ペテロはここで、旧約の預言者について語っているが、ことからは、預言者にのみ限られるのではない。パウロは、Ⅱテモテ三・一六で、「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものである」と言明している。聖書はすべて——いかなる部分も例外ではない、聖書の中のすべては靈感されている、すなわち、聖霊の導きの下に書かれたのである。

四 権威

啓示と靈感の見解の意味するところは大きい。第一に、聖書は、まぎれもなく、神の権威を持っている。自由主義神学においては(古、新ともに)、権威の概念は市民権を持っていない。聖書に、いくらかの権威を持たせようという考えも、あるにはあるが、それは、ひじょうに限られたものである。ふたたび、マッコーリーをして言わせれば、三つの権威——すなわち、聖書・伝承・理性がある。聖書に基本的権威を認めようとする傾きを示しはするが、他の二つの権威も、ほとんど同等に扱おうとする。

新正統主義においては、聖書はもっと中心的な位置を保っているとは言うものの、その権威は、はなはだしく限定されている。バルトは、「神の語ったこと」と、「パウロの語ったこと」を区別し、両者は同等ではないとする。パウロの言うことはそれ自体としては、人間の証し以上には出ぬ。神がそれを用いる時に、それは、「神は言う」となるのであって、それ自体としては、パウロの言葉は、たんに、人間の言葉に過ぎぬ。

福音主義に立つわたしたちにとつては、このような区別は、受け入れ得ないものである。このような区別を、聖書自身の中に見いだし得ないというのが、その理由である。このことについても、主イエス・キリストと使徒たちの態度に言及することができよう。旧約聖書が引用される所では、すべて、神の権威を持つものとして、引用されている。

この神的権威の性格を問うにあたり、唯一の答えは、「啓示的権威」である。啓示の概念から出発して論を進めてきた理由も、ここにあるが、他の権威の概念をここに持ち込むことは、全く正しくない。たとえば、聖書に科学的権

威を帰したとしよう。これは、ある根本主義者の誤りである。彼らは言う——「聖書は神の言である。ここで、神はわたしたちに語る」と。彼らは、さらに、創世記第一章からはじめて、科学的言明を洗いざらい拾いあげて言う。たとえば、H・M・モリスは『聖書と科学』で——「聖書は第一義的に、科学の書ではないが、近代の科学的真理を数多く含んでおり、いかなる科学的誤謬もない。……現代的視点をあらわすところが数多くあって、しかもそれが、あまりにも現代的であって、神の啓示であるということ抜きにしては、説明不可能と見えるほどである」と言っている。また、モリスはアメリカのある大学の水文学 (hydrology) 教授であるが、特に、伝道の書一・七の言葉を挙げて、三千年近くも前に、すでに、この現代の知識が、神によって啓示されているとも言っている。

わたしの意見では、モリスは、全く間違つたアプローチをとっている。聖書の權威は、モリスによれば、聖書自身の性格・射程・目的から切り離されてしまっている。聖書は、科学的データを与えることを目的とするものではない。聖書の目的はただひとつ——神に対する信仰、イエス・キリストにおける神の救いへと、わたしたちを、聖霊の力を通して導くことである。ヨハネ福音書二〇章の終わりの部分に明らか通りである——「イエスは、この書に書かれていないしるしを、ほかにも多く、弟子たちの前で行われた。しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」。

さらに、Ⅱテモテ三章に言う——「また幼い時から、聖書に親しみ、それが、キリスト・イエスに対する信仰によって救に至る知恵を、あなたに与えうる書物であることを知っている」(一五節)。「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。それによって、神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にととのえられた者になるのである」(一六、一七節)。

五 無謬性

聖書が神の言であるという事実から、必然的に、聖書の無謬性がひき出される。これは、教会教父・中世の神学者・改革者・現代のローマ・カトリック教会に連なる、れっきとした教会教理である。

第二バチカン公会議『神の啓示についての教義憲章』に言う——「ゆえに、靈感された著者・記者の認証するところは、すべて、聖霊によって認証されしところと知られねばならぬ。したがって、われわれは、聖書は、たしかに、真実に、かつ誤るところなく、神が、われらの救いのために、聖なる書にとどめられるよう望みたまうた、かの真理を教えるものである」。

福音主義者として、わたしたちは、この言明に同意する。と同時に、新正統主義と新自由主義に対して、きっぱりと立たねばならない。彼らはおしなべて、聖書は誤りうるものであり、現に、誤謬を含むと主張する。バルトもブルトマンも、この点では変わるところがない。前述の通り、聖書の実際の取り扱いから言えば、バルトはひじょうに控え目であるのに対して、ブルトマンの批評はひじょうにラディカルである。その差はあるにせよ、彼らは共通して、聖書に事実誤謬があるのみならず、神学的誤謬があるとする。

福音主義者として、わたしたちは、聖書が真の神の言であるならば、それは無謬であると信じると同時に、あらゆる誤解、誤謬を明らかにして行かねばならない。

わたしたちは、自分の先入観をもって聖書に來るのではなく、聖書自身に聞くものである。聖書の無謬性は、啓示的、無謬性であることを指摘すれば足りるのであろう。すなわち、この書において、神は、ご自身を、そのあがま、まに啓示される。神、あるいは神の救いのメッセーシが、わたしたちが聖書の中で読むところと違っていないかと懸念

する必要はさらさらない。詩篇一二・六に読む通りである——「主のごときは清き言葉である。地に設けた炉で練り、七たびきよめた銀のようである」。

聖書は、あらゆる点で無謬であるか？ 然り。しかし、このことは、啓示の実際の過程という文脈の中で考察されねばならない。啓示は、つねに「下降」の事柄である。受肉において、神のみ子がこの世に下り、肉体をとり、しかも弱き人間となられたように、すべての啓示は、わたしたちのレベルまでの、神の下降によって成立するものである。カルヴァンは、教会教父にならって、啓示における神のまどい、を語っている。啓示において、神は、ある時代の人に語るにあたって、その時代に住む、ある人を用いた。彼らの思考形式、彼らの表現形式、その時代の文化類型をくまなく用いた。この意味で、聖書は、はじめから終わりまで、セム的な書であると言うことができよう。あらゆるページに、セムの起源・背景・文化・展望がうかがわれる。

したがって、わたしたちの、現代的・科学的視点をもって聖書に近づき、その視点から聖書を判断することは、原理的に間違っている。たとえば、歴史の書き方は、現代のわたしたちの手法とは異なる。聖書は、概数しか語らぬことが多いし、ことがらについても詳説せぬことが多い。資料配列にあたって、ひじょうに体系的・図式的である。

これらのことは、いかなる意味でも、聖書の無謬性と信頼性をそこなうものではない。また、聖書の各書が、まぎれもなく、人間の著作性をあらわしている事実も、聖書の無謬性と相容れないものではない。特に、批評学が起こって以来、このことを、なお、一層強く確信させられている。批評学の手法を、わたしたちは恐れる理由がないし、これを用いないという手もあつてはならない。本文批評、文学批評、様式批評、それに、もつとも新しいものとして、編集批評の、いずれについても言えることである。これらの批評には、真理の要因があると信じているので、福音主義者として、わたしたちは、これらを用いることに意を用いて行きたい。

しかし、批評的立場に立つ学者と同じような方法で、これを行なうのではないことは言うまでもなからう。彼らの場合には、わたしたちが往々にして受け容れることのできない基本的前提がある。たとえば、現代の様式批評は、次のように断じている。

(一) いわゆる口伝のたそがれの時期(紀元三〇〜六〇年頃)には、福音物語と、いわゆる説話とは、異なったキリスト者共同体の中で、別個の単位として流布されていた。

(二) この時代には、いろいろなキリスト者共同体の信仰の影響を受けて、これらの単位は、次第に、改変され、修飾されるに至った。

様式批評の任務とするところは、オリジナルな単位を見いだすことである。だが実際には、新約聖書は、神学者の主観的判断にゆだねられることとなり、遂には、メッセージそのものが、福音書の言うところとは、似ても似つかぬものとなってしまった。

これは、わたしたちにとっては、全く受け容れることのできないところである。いわゆる科学的方法は、メッセージをよりよく理解するという目的からそれて、関係神学者の意見と傾向とによって、メッセージそのものが改変されるという結果を生んだ事例を、ここに見る。

批評の手法を合法的に用いてこそ、神の言をよりよく理解することに導かれるであろう。つきつめて言えば、わたしたちの神学のわざの全目的は、神がわたしたちと、いまの時代の教会に語るところを聞くことにある。

六 聖霊のみわざ

聖書を神の言であると理解すること、聖書において、神の生ける声を聞くことは、いわゆる学としての神学のこと